

研究者としてのリフレクション 雑感

八 島 智 子

もう少し若い頃、時間は永遠にあるものだと思っていた。九年半前に早期胃癌と診断された時、ほんやりとだけど死のふちに立つという感覚を経験し、人の時間は限られていることを体感として知った。その後元気に仕事に戻ったが、以前より時間の経過を意識して生きようになった。その時々を大切に過ごしてきた関西大学での時間もあと少しで終わろうとしている。楽しく充実した29年間であったが、「老いやすく、学成り難し」というのが実感である。本稿では、関西大学をめぐる数々の思い出の中で、研究についてのリフレクションを少しばかり書いてみたい。

その限られた時間、研究を大いに楽しみ、夢中にもなった。一方で自分の研究の意味についていつも悩んできた。医学の研究のように多くの人の命を救えるものでもなく、批判的研究を志向しつつも、社会の変革につながるような強い力があるわけではない。研究とは知を創造・蓄積・継承していくものだが、自分が関わっている分野にほんの小さな片^{かけら}でも残すことができたのだろうか、そういう思いが今私の頭の中をぐるぐる回っている。

(本稿では、日本在住あるいは関西大学に在籍した研究者に言及する際は、～先生、海外の研究者については、Dr. ～という表記とする。)

研究分野との出会い

私は応用言語学と異文化コミュニケーション学という二つの分野を研究領域としてきた。この少し異なる二分野の研究は、二人の恩師との出会いに始まる。1985年、多くの研究者を輩出し勢いのあった神戸市外国語大学の故河野守夫先生の門を叩いた。当時駆け出しの通訳者として奮戦する中で、二言語を用いたコミュニケーションについての疑問が次々と頭に浮かび専門的に研究したくなったのである。ご存じの人も多いと思うが、本学部の竹内理先生、山根繁先生、吉澤清美先生も河野門人である。河野先生からは研究へのひたむきな態度と「実証研究を積み重ねること」の大切さを教えていただいた。心理言語学を専門とされ、ひとが音声言語を理解し生成するメカニズムを中心に研究し、これを基礎に言語教育への応用も考える。まさに日本での応用言語学の先駆けであった。ただ私は、「あなたは社会文化に興味があるようだ」と先生に言われたように、先生の専門から少し外れた社会言語学的な研究で修士論文を書いた。

さらに文化の研究をするように薦められ、当時神戸市外大の教授であった久米昭元先生を紹介してくださいました。すでにご高名であった久米先生との出会いが、第二の分野、異文化コミュニケーション学への興味を開いていったのだ。久米先生はアメリカで生まれた異文化コミュニケーション学を日本に紹介・定着させるべく、様々な活動を主催されていた。お二人ともそれぞれの分野のパイオニアであり、極めて行動的な研究者である。お二方の研究への情熱が両分野に関わる私の基礎となっている。

異なった研究分野のクロスロード ― ブレンドして生成されるもの

二つの研究分野、応用言語学と異文化コミュニケーション学は、分野としてはかなり違うところに位置する。学会やコミュニティも別だし、投稿するジャーナルも求められる研究内容も異なっている。用語も違う。例えば、コミュニケーション能力という言葉をとっても、二分野で定義や使い方が大きく異なる。用語の使い分けなど異分野の狭間で結構苦労は多かったのである。私の研究テーマは、異文化背景を持った人が接触する状況でのコミュニケーション行動や第二言語を使用する際の心理、および第二言語習得の社会文化的側面や情意面なのだが、いずれも、応用言語学・コミュニケーション学に関係し、私の中では必然的につながっている。加えて社会心理学にも深く関わり、実は三領域が関係するのだ。社会心理学への案内人は、友人であり良きアドバイザーである、岡山大学の田中共子先生だ。田中先生の発想の豊かさは大いに刺激になった。異分野の交差点で行う研究は、難しさはあるものの、それゆえに新たな発想が生まれる可能性もある。応用言語学で最近よく使われるようになった「自発的にコミュニケーションを図る傾向 (Willingness to communicate)」の研究や国際的志向性という構成概念を生み出したのは、まさにこの異分野の交差点だ。

幸運だったのは、海外の研究者の中に、私と全く同じこの三分野に関わる研究をしている人たちがいたことだ。ウエスト・オンタリオ大学の Dr. Robert Gardner、ケープ・ブレトン大学の Dr. Peter MacIntyre やアルバータ大学の Dr. Kimberly Noels というカナダの心理学者である。1996年にフィンランドで開催された国際応用言語学会 (AILA) で、Dr. MacIntyre が *Willingness to communicate* というコミュニケーション学の概念を用いた研究を初めて応用言語学のコミュニティで紹介したのだが、私はそのシンポジウムの際にたまたま居合わせたのだ。その後、長文のメールで分析法や概念の扱いについてあつかましくも10項目を超える質問をした私に、Dr. MacIntyre は一つ一つ丁寧に回答してくれた。それが彼との交流の始まりである。また、私が言語習得に関連する変数として *Willingness to communicate* 概念を用いた一連の研究を始めるきっかけとなった。一方、異文化コミュニケーション分野に頭を突っ込んでいたおかげで思いついたのが、「国際的志向性」というコンセプトである。コミュニケーション分野で異文化コンピテンスの研究として蓄積されていた知見を応用言語学的な問題意識と組み合わせて、「国際

的志向性」の概念的定義とその測定のための心理学的尺度を開発した。英語の習得に影響する態度や行動傾向として提案したのだ。この測度は、多くの方に使っていただき、今も世界各地から質問や問い合わせをいただいている。

異文化コミュニケーションにしても、応用言語学、心理学にしても人間を理解することにはかならない。異文化接触という場で人を観察し、第二言語を使う場を分析する研究、それは人間理解に繋がる。人間が世界中を移動し多言語使用が常態化する世界で、この三分野のブレンド化は進んでいると個人的には感じている。

多様性に出会う国際交流

2005年のアルバータ大学での在外研究では、Dr. Kimberly Noels にすっかりお世話になった。双子の男子を出産したばかりだったのに、私を社会文化心理学科の訪問研究者として正式に受け入れてくれたのである。彼女とは毎日のように昼食を共にし、さまざまな議論をした。夏休みに準備を進め、秋学期の「異文化コミュニケーション」の授業を共同で担当した。その後、在外研究の後半にはイギリスに移動したが、ここでもロンドン大学のインド系の社会心理学者、Dr. Itesh Sachdev、バイリンガリズムの研究者、Dr. Jean-Marc Dewaele、さらには、動機付け研究で有名なノッティンガム大学の故 Dr. Zoltan Dörnyei と、ウォーリック大学の Dr. Ema Ushioda との出会いが待っていた。

以上の研究者とはその後も学会で会うことが多く、共同研究や共著論文、編著書に執筆する機会も得た。国際的コミュニティへの参加の醍醐味は、多様性に富んだ友好関係を得ることだ。同時に、異分野にまたがる議論もまた、多様な発想を生み出す。ダイバーシティはエネルギーを生み出すのだと本当にそう思う。上記に述べた先生方の多くが、関西大学に招聘され、外国語教育学研究科に海外の空気を吹き込んでくださったのはご存じの通りである。

国際的コミュニティへの参加——アジアからの声を届ける

1990年代は、応用言語学の国際誌の多くが、圧倒的に欧米の研究者の論文で占められていた時代であった。たまたま日本人の論文が載ることがあっても、たいがい海外の大学に在籍していた人だ。研究が行われるコンテクストも、欧米、特に英語圏であった。欧米中心の応用言語学にアジアのコンテクストからの発言をしたい、というのが当初の投稿の動機であった。ジャーナル論文は「ブラインド」で査読を行うので、著者のエスニシティやジェンダーは査読者には伏せられている。評価は書いたものだけに依る。それがとても良いと思った。（英語のスタイルが母語話者的でないと言った結果に影響する可能性があることについては、これを厳しく批判する人もいるように、実際に起こる。だから、英語はネイティブライクでなくても良いと学生に

言っていないながら (本当にそう思っている)、国際ジャーナル論文の投稿については、周到にプロに校閲を依頼することを薦めている (自己矛盾しているようだが)。今では当たり前になっているが、国際学会で発表したり、国際誌に論文を掲載することは、まさに国際的研究コミュニティに参加することだ。オーディエンスの幅が広がるので、視点を広げて、世界の応用言語学でどのような問題意識がもたれているのかを考えてみる必要があった。日本国内の問題意識を越えてより普遍的な知見を生み出すことが求められる。また論文の執筆においても、違うオーディエンスには違う書き方がある。こういって、ジャーナル掲載が研究の目的になっているように聞こえる。そういった面があることは否めない。しかし、国内のコミュニティを超えた出会いや議論の場もあり、共同発表や共同執筆の機会も生まれる。また、外国語を学び教えるものとして、外国語学習の一つの目的は「それぞれの学習者が大切だと思う国際的なコミュニティに参加すること」だと、自らの経験を踏まえて学生に言えるきっかけとなった。

研究法のはざままで迷い込んだ認識論的迷路

論理実証主義的な教育を受けた私にとって、2000年過ぎからじわじわと感じたパラダイムの転換の波は大きな刺激であり、自分の研究への取り組みを根底から見直す契機となった。特に言語学習動機付けの分野で、質的研究者から量的研究への学習者の真の理解につながっていないとの手厳しい批判があり、真剣に悩んだ時期がある。上記の在外研究の間にもそれ以後も、(日本が誇る) KJ法、グラウンディッド・セオリー・アプローチ、ナレーティブ研究など、質的研究法を学ぶ機会をみつけては、使用する方法論の幅を拡充する努力をした。お茶の水女子大学の箕浦康子先生からは、マイクロ・エスノグラフィーの手解きを受け感銘を受けたので、外国語教育学研究科にも講座を開設していただくようお願いした。科学的と考えられている量的研究も一つの視点を提供するにすぎない—現象は、見る人により、また見方により、問いの立て方により見え方が違うのだから—。認識論的迷路に迷い込んだ私が見つけた一つの道しるべが、矛盾を乗り越えて実証的・解釈的・批判的研究方法を融合するという考え方だ。米国の異文化コミュニケーション研究者 Dr. Judith Martin と Dr. Tom Nakayama が提唱する弁証法的 (dialectic) アプローチである。無論一人の研究者がすべての方法を十全に使えるわけではないが、広い視野は必要だ。その後は、現象の本質に迫るために役に立つ方法はなんでも使うという (やや節操のない) 姿勢で臨んできた。異文化接触研究においても言語学習の情意の研究においても、量的データと質的データを融合する。エビデンスを出せと言われると一般化に持ち込みやすい量的研究に説得力がある。一方、生きているコンテクストの中で人を観察する質的研究は、より全人格的な理解に近づける。批判的な研究で主張を裏付けるためには、数字で示すことも人の語りも有効になりうる。量研究のツールが統計なら、質研究のツールは研究者自身というのも良い。最近では量と質を組み合わせた混合法も、現実的な物事の解決を志向する

研究にはよく用いられる。あれこれ悩んだ末、対象が置かれた社会文化的な状況を十分に考慮しつつ、多様な手法を駆使して研究課題に合った研究をするのだ、ということで、一応の解決策を自分なりに見出した。この時期に方法論の模索と葛藤を経験したことは、その後の研究指導に役に立ったと感じている。

研究指導から得る学びと喜び

関西大学で過ごした時間の中で、大きな喜びを与えてくれたのが、大学院生との協働である。外国語教育学研究科の学生は社会人が多い。女性の割合が多いのも特徴である。仕事と研究の時間の配分や調整で悩み、さらに出産、育児などが加わり、複雑な研生活トラジェクトリーを辿る人が多い。研究指導者としては、気長に、それぞれの学生の置かれた立場を十分理解しながら、でも時に厳しく、目的に向かって軌道を調整しつつ指導していく必要がある。容易ではない。しかし、熱意のある学生に恵まれ、その研究を共に作っていくプロセスは、私の関西大学での生活に、大きな喜びと充実感を与えてくれた。より良い研究指導をするために自らが良い研究者になる必要があると感じていた。

大学院の八島ゼミでは、修士・博士合同研究会を年に3～4回は行うのが恒例であった。ゼミの懇親会予算で茶菓子を準備し、朝の10時から夕方6時ごろまで、10人ほどの学生が順番に研究発表を行う。美味しいスイーツが息抜きといったところ。忌憚のない意見交換を行い、できるだけお互いの研究をより良くする方法をみんなで考える。互いに切磋琢磨すると同様に、データの収集などにおいて協力も行う。まさに実践の共同体である。昼食、夕食、あるいは両方を懇親会の場として開設し、その場でも議論や質問のやりとりが続くこともある。どっぷり、研究に浸かる1日である。学生たちは、このゼミ発表会を目指して研究を進めており、ペースメーカーの役割を果たしていたという。結果として6人の博士、21人の修士を送り出した。現在多くの修了生が、中学校、高等学校や、大学において、教育・研究に携わっている。彼女たちのおかげで確実にスピリットは継承されている。

対話としての研究——共同体の外に声を届けられるか

振り返ってみて研究は対話だということを実感している。例えば、文献を読むことは時空を越えた対話である。近接領域では人の論文を読んで、自分の論文への批判として受け止めることもあれば、共感をもって引用されていると感じることもある。また自分が誰かの研究に回答するように書いていることもある。論文を読むことも書くことも実践共同体の中に参加し、コミュニケーションを行うことなのだ。

しかし、実践の共同体内の対話はできても、共同体の外の世界との対話はできていたか？ 研

究生活を振り返ってみての反省点である。冒頭の問い、研究の意味についても、実のところ明確な答えは得られていない。国際誌に投稿することが目的化した時期があったことを述べたが、それは必ずしも悪いことではない。医学の分野において、国際誌に載せる競争の中で蓄積されたデータが、新たな知を生み出し、時に大きな貢献となるように。一つ一つの研究はほんの小さな石片を積むようなものかも知れないが、多くの人の参加でそれらが大量に積み上がり、いつかは山になり何かがやっと姿を見せるのかも知れない。私の研究も、先行する研究者が積んでくれた石があったおかげでできたのだ。その基礎の上に、一つ一つ小さい石の片を積んでいく。異なった言語文化の知識と視点、異文化と対応するコンピテンスなど、一人一人の資質を伸ばしていくことが、多様な人が共存できる社会の集合的な進化につながることを信じて、手元の研究を続けていくのである。研究費を得て、かなりの時間を費やし（それ自体大変恵まれたことだ）、さらに私の場合人を巻き込む研究なので他の人の時間も使うのだから、必ず取ったデータはたとえ小さな片でも何らかの形で発表する責任があると思っている。公開することによって他者の評価を受ける。対話を起こす。その声を拾って誰かが反応する、その連鎖の中で新たな知見が生まれてくる可能性を信じ、自分のしたことが次の誰かの研究につながることを祈り開示する、その責任は回避すべきでない、そう思う。さらに共同体の外に、社会に向けて声を出す活動をしていくことも必要であろう。

振り返ってみると、大した貢献もできずまだまだ未熟なままで去っていく自分がある。でも私個人にとってはとても楽しく豊かな時間であったことは確かだ。対話としての研究の一つに共同研究がある。本学部の先生方の多くと共同研究・共同発表・共同執筆をする幸せを得た。―竹内理先生、山根繁先生、吉澤清美先生、名部井敏代先生、サイモン・ハンフリーズ先生、池田真生子先生、水本篤先生、植木美千子先生、退職された杉谷眞佐子先生、静鉄人先生、スコット・オーブリ先生と共に考え、発表し、書くのに費やした時間は、着実に私の中で結晶として残っている。関西大学外国語学部で過ごした時間は私のキャリア人生そのものである。このあとも言語や文化について考え続けることをやめず、心は一生研究者でありたいと願っている。